

# 古代史散策

No. 005

奈良西部 佐紀大古墳群

さき たたなみ  
佐紀盾列・平城京跡

パナソニック電工松寿会  
古代史散策部

昭和53年 8月作成  
平成 4年 3月復刻  
平成14年 3月3刻  
平成29年 3月4刻

## 《コース》

近鉄京都線 平城駅 — 神功皇后陵 — 成務天皇陵 —  
日葉酢媛（垂仁后） — 称徳（孝謙重祚）陵 — 平城宮跡（大極  
殿） — 平城天皇陵 — 磐之姫（仁徳后）陵 — コナベ古墳・  
ウワナベ古墳 — 法華寺 — 近鉄新大宮駅 ... 解散

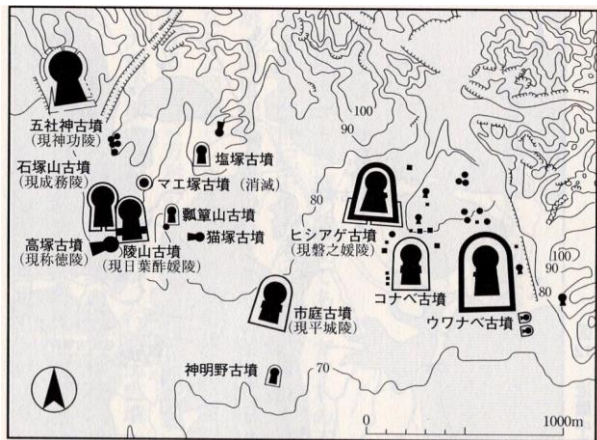
## 《 総 説 》

平城故京の北をさえぎる低い山並み、その南麓に派生する支尾根のかずかず、そこが佐紀楯列の地だ。「佐紀」は狭城とも狭木とも当てられ、文字そのものに意味はない。古代やまと言葉の「佐紀」は“崎”であり、山並みが平地又は水面に落ち込む先端の意である。

楯列は、古事記倭建命国思歌にある「たたなずく」、「たたみこも」のタタと同義語で、「畳々とならぶ」の意であり、一般に云われている「山の端が楯を列べたように並ぶ」の意は採らない。

佐紀丘陵は東に続く佐保、奈保と併せて、所謂「青丹よし奈良の山」であって、大和朝廷のあった三輪山麓や飛鳥の地を守る、北方最前線であったことは、神武東征伝をはじめ崇神記の武埴安彦反乱、近くは天武天皇の壬申の乱の激戦地になったことでも伺える。古くは添上、添下郡であり、大和朝廷6県の一つ「層富御県」であった。「そふ」乃至「そほり」は、百済最後の王城の古地名「徐伐 Sio-por」であり、朝鮮

古語 Spur・Saurに通じ（シヨは金を、ホル乃至フルは光り輝く、の古朝鮮語意）山代川（木津川）を北にひかえ、開拓の進んだこの地が「添」と呼ばれたのは、朝鮮からこの地への移住民の多かった AD300～400 の頃からであったかも知れない。



佐紀古墳群分布図

## 《 各 説 》

### 【神功皇后狭城盾列池上陵】

奈良市山陵町

前方後円墳で墳長 267m (11 番目) 前方部幅 150m・後円部直径 190m。伝開化天皇曾孫という息長宿祢と葛城高額媛の間の女、女性巫女の伝承。日本書紀は、おそらく卑弥呼を神功に想定したらしいが宋書の倭の五王の「讚」を仁徳（或いは履中）とすれば年代が合わない。

その本名息長<sup>おきなが</sup>足<sup>たらし</sup>姫、その居住地角鹿<sup>つぬが</sup>（現敦賀市）との伝承（紀）から見て、渡来系の血の濃いことを思わせ、天日槍<sup>あめのひぼこ</sup>  
=>息長氏系が辰韓（後新羅）からの移民の末とも考え得る。だから熊襲の反乱の背後に新羅のあることを知っていたのであろう。

54 仁明天皇（843）朝、山陵雷鳴し、赤気、旋風の如く飛び去り、これを陵守百濟春<sup>みさきもりく</sup>継<sup>だらのしゅんけい</sup>、検するに、陵の木乱伐されているのを知り奏言す。京師の使は、間違っ南の成務陵に謝していたことが判り、両陵に誤りを詫びた。世の口伝は既に不明となっていたのである。

### 【13 成務天皇狭城盾列池後陵】

奈良市山陵町

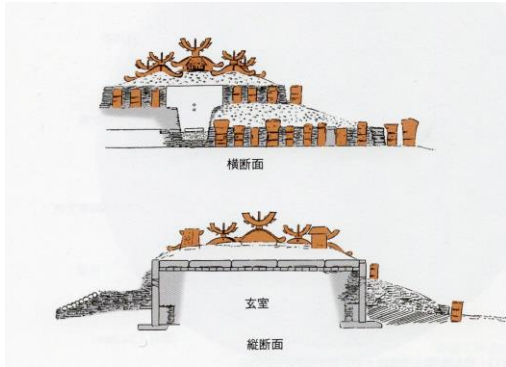
前方後円墳で墳長 218m・前方部幅 111m・後円部直径 132m。  
13 成務天皇は、崇神天皇以来の国土平定の戦いの後を受け、<sup>くにのみやつこ</sup> 国造、<sup>あがたぬし</sup> 県主を整備し、平穩の中に送られたのであろう、特別な伝承も残っていない。康平6年、興福寺僧等 16 名が、この陵を盗掘して捕らえられた。副葬品はもとの如く返納せしめられたが、石棺中に多量の辰砂（水銀・朱）と勾玉、管玉が江戸末期に出たという。

### 【日葉酢媛（11 垂仁后）狭木寺間陵】

奈良市山陵町

前方後円墳で墳長 207m・前方部幅 87m 後円部直径 131m。  
垂仁天皇の前の后沙本比売<sup>さほひめ</sup>は、兄沙本比古<sup>さほひこ</sup>から、帝に対する反乱を打ち明けられ、兄と天皇の板挟みとなって苦悩されるが、終に兄のもとに到り、焼け落ちる城と共に焼死する。そ

の遺言により、丹波の美知能宇斯王の女<sup>みちのうす</sup>5人を召され、長女の比婆須比売<sup>ひばす</sup>を后とされた。この陵は、土師連の祖野見宿祢<sup>はじのむらじ</sup>の「埴輪」伝説の陵である。何度かの盗掘にあい、大正期に迄盗掘に見舞われたが、後円部頂に造られた方形丘に堅穴式石室があり、周囲は円筒埴輪、楯等の形象埴輪が取り囲み、頂部<sup>つにつき</sup>は角付埴輪が整然と並べられていた。宮内庁書陵部に実測した資料が残っている。



和田千吉氏による復元図

11 垂仁天皇の説話は、記紀ともに急激に増える。

- 即ち (1)倭媛命の伊勢神宮創祀譚  
 (2)佐保彦の反乱と佐保媛後の焼死  
 (3)本牟智和氣の御子と父天皇の父性愛  
 (4)野見宿祢と埴輪創始譚  
 (5)野見宿祢と当麻蹴速<sup>たいまのけはや</sup>との角力の始めの説話  
 (6)田道間守<sup>たじまもり</sup>と時じく<sup>かぐ</sup>の香の木の實の話

しかし 父崇神と皇子景行には国土攻略譚をその主題としているのに、この天皇にはそれが述べられていないのは不可解であって、記紀の編者が崇神と景行を結びつける為、無理に垂仁の事績としたような作為が感ぜられぬこともない。

【48 称徳 (46 孝謙重祚) 天皇 高野陵】 奈良市山陵町

前方後円墳で墳長 127m・前方部幅 70m 後円部直径 84m。弓削道鏡との情事に溺れた女帝は、思えば藤原一族の権力欲の犠牲を強いられ、一生を台無しにした哀れむべき女性であった。崩御の後、僅か 20 日で埋葬されたとある、従ってその陵墓は古い古墳を流用したことは明らかである。藤原氏が道鏡の台頭を押さえる為であった。

道鏡 女帝陵の前に額き、旬月を超えたと云う。

女帝享年 53 才、道鏡は下野国薬師寺に追放された。

【51 平城天皇 楊梅陵】 奈良市佐紀町

前方後円墳で、前方部は消滅し後円部のみが残存していたため円墳とされていたが、その後の調査によって前方部が明らかにされ、周濠も埋められていたことが判った。その際多数の円筒埴輪も出土した。

天皇は都が平安(京都)に遷って間もなく、平城京に遷都したいという意思を抱きながら実現不可能となった。

【磐之姫 (16 仁徳后) 平城坂上陵】 奈良市佐紀町

前方後円墳で墳長 219m・前方部幅 145m 後円部直径 125m。足もあがかに嫉妬したとの古伝説ある磐之姫皇后は、古代豪族葛城襲津彦<sup>かつらぎのそつひこ</sup>の娘、17 履中 18 反正 19 允恭の母と伝える。仁

徳天皇が八田若郎女を妃に入れることを峻拒し続けた皇后が紀の国熊野へ行啓中、ひそかに天皇は八田若郎女を妃としたことを知り、高津宮に入らず山背川をさかのぼって、筒城宮つつき或いは筒木韓人の家に入り遂に帰宅を肯んぜず、その地に薨じ乃羅山に葬られたと云う。

つぎねふ／山背河を宮上り／吾が上れば／あをによし  
那羅を過ぎ／小楯／倭を過ぎ／吾が見が欲し国は／  
葛城高宮／我ぎ家のあたり (古事記)

### 【コナベ古墳・ウワナベ古墳】

コナベ古墳…墳長 208.5m・前方部幅 129m 後円部直径 131m。  
ウワナベ古墳… $\pi$  255m・前方部幅 130m 後円部直径 130m。  
いずれも前方後円墳で共に天皇陵参考地として宮内庁が管理している。

両陵とも多数の陪塚を伴い、ウワナベ古墳の陪塚の幾つかは、進駐軍の兵舎造成のため破壊されたが、末永雅雄博士(考古学)の要請により、兵衛内の5基中、方墳の1基のみが、僅かに破壊をまぬかれた。発掘調査の結果、大和6号墳(円墳、直径25m)より、おびただしい鉄製農耕具(鍬先179個、鎌139個)同工具斧頭102個、鉄刀状工具284個、鉤9個、大型鉄鋌282個、小型鉄鋌590個その他鉄製武器多数出土。



### 【法華寺】

奈良市法華寺町

十一面観音を本尊とする、法華滅罪之寺、尼門跡寺院とも氷室御所とも呼ばれる寺院。

元藤原不比等の邸宅跡といわれ、戦後、解体工事が進められ、本堂床下から邸宅のものと思われる掘立柱の基部や、礎石・瓦などがあらわれた。

不比等の死後、その子光明皇后に相続され、やがて先帝(聖武天皇)などの菩提を弔うため法華寺となった。

天平12年(740)の頃である。

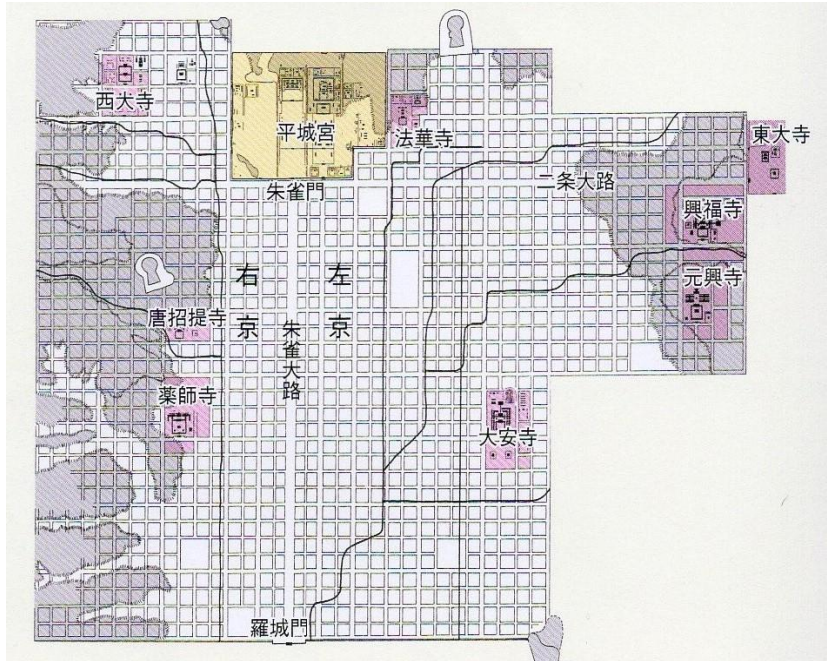
創建当時から尼寺で、天平勝宝元年(749)には水田千町歩を賜り、総国分寺としての東大寺に対し、総国分尼寺としての威容を誇る、堂々たる伽藍であったと思われる。しかし現在では、本堂(重文)を除いて古いものは残っていない。

### 【平城京跡】

東西約4.3km, 南北約5.8km。外に北辺と外京を備える。元明天皇和銅3年(710)飛鳥藤原京より遷都。爾来延暦3年(784)の長岡京遷都迄の74年間(天平12~17の間は、恭仁=難波へ遷された)日本の首都となった。

京の中央を南北に通る朱雀大路は、昭和49年の発掘調査により、幅員=84mの文字通りの大路であり、その南端に羅城門(現大和郡山駅の東、来世橋近く)あり、城坊の内は16に分割(坪)した。

平城京の最盛時の人口約20万人、内約1万人は都仕えの宮人、仕丁、雇夫達と推察されている。



“青丹よし／奈良の都は／咲く花の／にはふが如く／  
今盛りなり”と詠唱された平城京は、桓武天皇の長岡京遵都に忽ちにして荒廃し、25年後には外京を除き一物も、残さず田畑と原野と化して、忘却の彼方に置き忘れられてしまった。平城京跡が辛くも保存された背後には、土着の農民の敬虔な祈りにも似た努力の賜物であって、大極殿跡は“大黒の芝”と称し、朝堂院の土壇と共に開墾もせず手つかずに守り継がれてきた。

幕末嘉永5年北浦定政、の「平城大内裏坪割田」作成が宮跡研究の最初であるが、明治32年1月大極殿跡を大黒の芝にさぐりあてた建築史家関野貞博士は、8年後の明治40年「平城京及び大内裏考」を公刊。これを聞いて遺跡の保護に徒手空拳家財を傾けて狂奔したのは、他ならぬ奈良の植木職棚田嘉十郎氏であり、自宅が宮跡にあった溝辺文四郎、文太郎、文和の3代に渉る一家の人々であった。明治43年4月20日宮内省より御下賜金300円を奈良県に下賜。

大正5年大極殿、朝堂院一帯6ヘクタールを確保。大正11年47ヘクタールを史跡に指定。昭和27年特別史跡に指定。昭和45年120ヘクタール周囲4.6kmを国有地とする。発掘調査開始昭和28年11月木簡の出土は有名である。大内裏東南の苑名足社には、持統6年(692)新羅使節奉幣すと云う。

奈良山南麓には早くより朝鮮渡来の民の住みついた所であった。



復元された大極殿

## ( 参 考 )

近鉄平城駅から西を眺めると、奈良競輪場の向うに一群の森が見える。そこが乾漆仏の技芸天（国宝）が坐す事で有名な「秋篠寺」である。

秋篠寺から北へ連なる森は「押熊<sup>おしくま</sup>」の地。押熊とは、平城京（奈良の都）の押しづまったスミの意で、平城京の瓦を焼いた跡が、農家の庭の至る所で、瓦の破片と共に見出だす事ができる。

## 《 秋 篠 氏 》

西大寺の南方一帯の菅原の地と共に、11 垂仁天皇の御代、野見宿祢が出雲から呼び迎えた、造土埴<sup>はに</sup>（土器）と造土木の熟練技術集団が、この地（佐紀，佐保，奈保）の大古墳造営後も、そのまま居残ったところである。藤井寺にも「土埴<sup>はし</sup>の里」なる地名があるのは、藤井寺から古市にかけての一大古墳群が、土埴氏の一族より造営された名残で、ここにも土器を焼成した跡が残っている。

平安時代の極く初期、菅原在住の土埴氏は、京都の朝廷に、先祖の功に対して何等報われる事のなかった事を訴え出たので、朝廷は、彼等に「菅原氏」を賜わった。これを知った秋篠在住の土埴氏も同様の訴えを起こし、「秋篠氏」の姓を賜わったのである。

なお菅原氏，秋篠氏共多くの学者を輩出し、菅原道真は菅原氏の後裔である。

作成 西村誠 復刻・3 刻 末岐敏一  
4 刻 宮下章宏、堀内 肇  
解説・案内 河内正明・堀内 肇

